

音楽の力で日韓を結ぶ

東京フィルが大邱「アジア・オーケストラ・フェスティバル」出演



好評だった東京フィル大邱公演(2013年12月26日)

日本を代表するオーケストラの一つ、東京フィルハーモニー交響楽団が昨年末、大邱市で開催された「アジア・オーケストラ・フェスティバル2013」に参加し、音楽を通じた市民交流を深めた。同楽団広報の本多仁美さんにルポを寄せてもらった。

音楽都市として 発展する大邱市

昨年11月29日から韓国・大邱市で開催されている「アジア・オーケストラ・フェスティバル2013」が25日、いよいよフィナーレを迎える。

同フェスティバルは、15年に開館40周年を迎える大邱市民会館のリニューアル・オープンを記念して企画されたもので、韓国国内から7楽団、国

大邱市は世界遺産「高麗八萬大藏経」を収める海印寺が近くにあることでも有名な文化都市だが、4つのプロのオーケストラ、5つの音楽大学を備える音楽都市でもある。

オーケストラをはじめ、合唱団、舞踊団等、市立の芸術団体は6団体あり、オペラハウスで毎年開催されている国際オペラ・フェスティバルも今年で11年目を迎える。

アジアから世界へクラシック発信

今回、多目的ホールからシューボックス型のコンサート専用ホールへと、2年余をかけて大規模なリニューアルが行われた市民会館は、「大邱市の、音楽の故郷」のよう

な場所」と館長のペ・スンジユ氏は語る。

ペ氏は、「その歴史を忘れないために移転ではなく改装の道を選びました。これを機に大邱市が韓国におけるクラシック音楽の拠点となればと願っています。大邱市交響楽団は来年50周年を迎えますが、100年の伝統をもつ東京フィルのフェスティバル参加は、歴史的な面でも大きな意味をもっています」と力を

込めて語った。

東京フィルの出演は、フェスティバル半ばの昨年12月26日だった。指揮

は桂冠指揮者の大野和士、ソリストには韓国出身のチェリスト・ソニン・カンを迎えた。

ソニン・カンは、06年にカンが優勝した「ガスパール・カサド国際チェロ・コンクール」で「王子」以来2度目の共演である。

プログラムはドボルザークのチェロ協奏曲と交響曲第9番「新世界より」。約1300席のチケットは早々に完売し、12月初旬に急ぎ追加販売された舞台後方の合唱席も埋め尽くしての満員御礼となった。

客席の年齢層は幅広く、親子連れや学生などの若い層が半分近くを占める点が、年配層が大半

を占める日本の客層とは大きく違う。

カンは圧倒されるほどの集中力で劇的にチェロ協奏曲を歌い上げ、「新世界」では、最後まで一瞬のゆるぎもない大野の指揮にオーケストラが熱く応え、曲が進むほどに会場との一体感が増していった。

両曲とも、演奏が終わるやいなや歓声とともにスタンディング・オベーションとなり、終演後のロビーでは「協奏曲がすばらしかった」（52歳・女性）、「ソニン・カンから目が離せなかった」（26歳・男性）、「オーケストラが完璧」（67歳・男性）、「とにかく音がすごい」（16歳・男性）などの声がかつた。中には「機会があったらレッスンを受けた

い」と熱心に話す音楽大学の学生の姿もあった。

終演後、カンは「緊張したけれども、気持ちよく演奏することができた。観客のこの反応は、本当に盛り上がった証」と語った。

コンサートマスターの三浦章宏も、「日本を代表して来たという誇りとともに良い演奏ができたこと、そこに私が指揮者として参加することができたことに胸がいっぱい」と話し、「今日ここで私たちは音楽の力で結ばれたという確信を、おそろくお互いに持つことができた。これからも地道にこのような活動を続けていくことが大切だ」と強調した。

2005年に日韓国交正常化40周年を祝して東京フィルが大邱で演奏を行ってからもなく10年、来る2015年の同50周年への道程は平坦ではない。

しかし、音楽を通じた文化を通じて、互いが確かな一歩を踏み出そうとしていることを満座の拍手の中でかみしめる一夜となった。

アジア・オーケストラ・フェスティバルは15年以降、継続的に開催される予定だという。

アジアから世界へ、クラシック音楽の新たな発信拠点が誕生したことに、よりの、アジアのクラシック音楽の可能性はますます広がっていくに違いない。（本多仁美・東京フィルハーモニー交響楽団広報）